

◆ 「せつなさ」の底にあるもの ◆

ショパンの練習曲作品10 第3番木長調。『別れの曲』として知られるこの美しい曲は、作曲者1832年の作とされる。この頃ショパンの生活の舞台はパリであったけれども、この年をさかのぼる数年前に、彼は祖国ポーランドを離れている。この曲に流れる郷愁めいた「せつなさ」は、この一連の時の流れの事情が関連しているのであろうことは想像に難くない。

さて、このショパンの才能を見出したシューマン。「ウルトラセブン」の最終回でも印象的に使われた彼のイ短調のピアノ協奏曲に、夢見るような第2楽章を経てAllegro vivaceで進む全曲の終わり近く、何回かのヘミオラの後、少しだけテンポが緩む箇所がある（911小節～）。いつもこの箇所にさしかかると、何ともいえない叙情的な「せつなさ」とともに、何かへの「別れ」の感情を抱いてしまう。

また、「やがて私の時代が来る」という言葉で知られるマーラー。彼の3番交響曲は全曲の演奏に2時間近くかかる大曲。アダージョになる最終楽章のエンディング近くに、金管楽器による、本当に小さな音から始まる賛美歌のようなコラールがある。何かを仰ぎ見るようなその音列の中に「せつなさ」が潜む。その先は、全管弦楽による、大伽藍のような集結部が来る。

「せつなさ」を感じさせる音楽ばかり並べてみた。

思うにこの「せつなさ」、一言で表現することはとても難しい。

「せつない」を辞書で調べると、“sad and painful”（プログレッシブ和英中辞典）とあるが、微妙なニュアンスまではなかなか伝わらない。

もののあはれ、sentimental…、いろいろな言葉が思い浮かぶけれども、そこに思い至る過程において、どこか「生きる力」と結びつくように思う。再びそこから何かを始めようとする「トリガー」のようなもの…。

私事になるが、この年度末に定年退職となる。

2年前の春、本校に赴任して早々、学校は臨時休校となった。

「会うは別れの始め」という。ついこの間卒業したばかりの3年生、そして現在の2年生とは2年間、1年生とは1年間のお付き合い。物理的な時間の経過からすれば決して長い時間ではなかったけれども、現在のコロナ禍の状況下、当たり前だと思っていた日々の生活が、かけがえのない宝物であったことに改めて思い至った時の流れとなった。

最後の話題もまた音楽のことになってしまった。しかしながら、その中に「せつなさ」を感じ、そしてそのことが少しでも「生きる力」につながるものになれば、と願っています。

ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございました。



（吹奏楽部第39回定期演奏会より）